新定女子文典 全巻

375.9
Ha7
資料室

42132
教科書文庫
4
815
42-1912
20600
18006

資料室
375.9
Ha7

大正元年十一月三日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一著

新定女子文典

東京文昌閣發行

広島大学
教
18006
図書

新定女子文典緒言

教員諸君に申す

一、女學生をして國文典の大要を知らしむる目的を以て本書を編著せり。明治四十四年七月文部省訓令高等女學校及び實科女學教授要目に準據して、現代文に通有せる法則を説明するを主眼とす。

二、女子用讀本に於ては、多少の近世文、近古文を併せ課するを以て、今文には用ひざる助動詞の如きも亦、便宜之を附說せり。

三、分類、名稱の繁冗なるより、生徒をしてまづ其の記憶の

爲に疲れしむるは、從來の文法教授の弊害なり。　本書は成るべく之を單純にして、練習によりて實効を擧げしむるに務めたり。

四、動詞の活用形を諳記せしむるが如きも、勞多くして益尠し。　本書に於ては最も簡單なる方法に據り、記憶し易からしむ。　第十四章に說明せるもの即ちこれなり。

五、動詞の自他を辨別し、客語補語の別を立つるが如きも亦無用の事に屬す。　國語の性質上より見て、すべて之を補語として、下卷の文の構造に略述せり。　自他の誤の如きは第一五四節を理解せしめば、之を避くると易々たらん。

六、第四篇に正誤篇を置き、假名遣以下主要の誤謬に就きて說明せり。　從來學習せる所を復習すると共に、應用の知識を得しめんが爲なり。　生徒にして若し能く之を習得せんか、自作文の語法に於て、必ず大過なきを得ん。

七、動詞用ふは上一段活用とすること學說に於ては正しきが如し。　然れども國定讀本に、すべては行上二段と定めるを以て、今は之に從へり。

八、教員諸君が本書を使用せられたる後、實際上の便否に就き、若しくは改良すべき諸點に就き、忠告の勞を賜はらんことは、編述者の熱望に堪へざる所なり。

大正元年八月三十日

編述者　しるす。

新定女子文典上巻目次

第一篇　詞の種類

第一章　名詞……一
練習一……三
第二章　代名詞……四
練習二……五
第三章　數詞……六
練習三……七
第四章　形容詞……八
練習四……九
第五章　動詞……一〇
練習五……一一

第六章　副詞……一三
練習六、七……一五
第七章　助動詞……一六
練習八……一八
第八章　助詞……一九
練習九……二一
第九章　接續詞……二二
練習一〇……二四
第十章　感動詞……二四
第十一章　十品詞……二五
練習一一……二七

第二篇　語の活用

第十二章　動詞の活用……二九

其の一、五十音の行の四段にわたりて活用するもの……二九
練習一二……二九
其の二、五十音の行の二段にわたりて活用するもの……三九
練習一三……三九
其の三、五十音の行の一段にのみ活用するもの……三九
其の四、五十音の行の三段にわたりて活用するもの……四一
練習一四……四三
第十三章　形容詞の活用……四四
練習一五、一六、一七……四八
第十四章　動詞の活用形……四九
其の一、終止形と連體形……四九
練習一八……五〇
其の二、未然形と已然形……五一
練習一九……五三

其の三連用形……五三
其の四命令形……五四
第十五章 形容詞の活用形……五五
第十六章 助動詞の活用……五七
第十七章 用言と助動詞との連結……五八
其の一、時のあらはし方……五八
其の二推量義務等のあらはし方……五九
其の三、打消のあらはし方……六〇
其の四、使役受身等あらはし方……六一
其の五敬語のあらはし方……六二
其の六、其の他の助動詞……六三
練習二〇……六六

新定女子文典上巻目次終

廣島大學圖書之印

新定女子文典 上巻

文學博士 芳賀矢一著

第一篇 詞の種類

第一章 名詞

〔一〕日本、朝鮮、大阪、横濱、歐羅巴、印度、ロンドン
香港、上海の如きは塲處の名なり。

〔二〕大伴家持、紫式部、清少納言、赤染衛門、爪生岩子
ナイチンゲールの如きは人物の名なり。

〔三〕熊、牛、馬、狐等は獸の名、梅、櫻、松、杉等は木の名、單衣、袷、綿入、被布等は着物の名、鍋、釜、樽、杓子等は道具の名なり。

〔四〕手、足、腹、背は身體の一部分の名、根、葉、枝、幹等は植物の一部分の名、衿、裾、袖、袂等は着物の一部分の名、底、蓋、柄、呑口等は道具の一部分の名なり。

〔五〕上、下、縱、横、東、西、南、北の如きは位置又は方角をあらはす名なり。

〔六〕春、夏、秋、冬、心、夢、命の如きも、形なきものに附けたる名なり、

〔七〕里、町、間、尺、寸、貫、匁、圓、錢、厘の如きは

度量をあらはす爲の名なり。

〔八〕白、黑、赤、青、等は色の名、長さ、厚み、太さ、美しさ等は分量、形狀、性質をあらはす名なり。

〔九〕操、儉約、慈善の如きは事柄の名なり。

すべて物事の名として用ふる語を名詞といふ。

練習一

左の文より名詞を摘出せよ。

一　犬もあるけば棒にあたる。

二　花より團子。

三　花は櫻木、人は武士。

四　口は禍の門。

五　勉強は幸福の母なり。
六　あつささむさも彼岸まで。
七　朱に交れば赤し。
八　福壽草は牡丹芍藥などと同じ種類の植物なり。
九　孟子幼き時より父なくして母に養はれたり。
一〇　吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限は櫻なりけり。

第二章　代名詞

〔一〇〕わらは、私、自分等は自己の名に代へて用ふる語なり。

〔一一〕あなた、君、彼、先生、閣下等は他人の名に代へて用ふる語なり。

〔一二〕これ、それの如きは物を指して其の物の名に代へて

用ふる語、ここ、そこの如きは場所を指して其の場所の名に代へて用ふる語なり。

〔一三〕こち、そちの如きは方角を指していふ語なり。

〔一四〕誰、いづれ、いづこ、いづち等は人、物、場所、方角、確かにそれと定まらぬものを指していふ語なり。

すべて物事の名に代へて用ふる語を代名詞といふ。

練習二

左の文より代名詞を摘出せよ。

一　いづれの國にも其の國のしるしの旗あり。
二　誰か鳥の雌雄を知らん。
三　己の欲せざる所は人に施すなかれ。

四 汝に出でたるものは汝にかへる。
五 いづこも同じ秋の夕暮。
六 こゝなる門は誰が門。
七 彼の語るを聽きて皆其の說に服せり。
八 かしこゝにて摘めるわらびは二つの籠に滿てり。

第三章 數詞

〔二五〕一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、一、二、三、四、五の如きは物事を數ふる語なり。

〔二六〕一つ目、二つ目、三つ目、第一、第二、第三、第一號、第二號、第三號、第一番、第二番、第三番の如きは物事の順序を數ふる語なり。

〔二七〕猫一匹、雞二羽、鯛五尾、長持六棹、鏡三面、帶二筋などの匹、羽、尾、棹、面、筋は唯數ふる爲に加へたる語なり。又屛風一双、靴足袋一ダースの如く一以上の數を一纏にしてあらはす語もあり。

〔二八〕いくつ、若干、幾何、數多の如きも數をあらはす語なり。

物事の數又は數の順序をあらはす語を數詞といふ。

練習三

左の文より數詞を摘出せよ。

一 一番目の弟は十歲なり。
二 一冊の價十二錢五厘なり。

三　百里を行くものは九十里を半とす。
四　一反の紋付は少くとも七軒の染物屋の手を要するなり。
五　四月三日は神武天皇祭なり。
六　在位二十五年、四十八歳にして位を皇太子に讓り給ふ。
七　太陽の容積は地球の百二十八萬倍なり。
八　我が兄は歩兵第一聯隊第一大隊の上等兵なり。

第四章　形容詞

〔一九〕長し、短し、細し、太し、輕し、重し、高し、低しの如きは、名詞の上又は下につきて、其の物事の分量を形容する語なり。

例、長き絲　絲長し
細き針　針細し

〔二〇〕赤し、黒し、青し、白しの如きは物事の色合を形容する語なり。

〔二一〕汚し、美し、貴し、賤しの如きは物事の性質を形容する語なり。

名詞の上又は下につきて其の物事を形容するに用ふる語を形容詞といふ。

練習四

左の文より形容詞を摘出せよ。

一　父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
二　時計の長き針は時を示し、短き針は分を示す。

三　良藥は口に苦し。

四　苦しき時の神だのみ。

五　賤しき人にも貴き行あり。

六　馬の歩は早く牛の歩は遲し。

七　小供の象に乘りて行きかふなど、愛らしくめづらし。

八　鹽はからく、砂糖は甘し。

九　あるじなしとて春を忘るな。

一〇　天に二日無し。

第五章　動詞

〔二二〕握る、つかむ、拾ふ等は手のはたらき、蹴る、躓く、走る等は足のはたらきをあらはす語なり。

〔二三〕見る、にらむは目のはたらき、聞く、聽聞す、嗅ぐ、食ふ、の如きは耳、鼻もしくは口のはたらきをあらはす語なり。

〔二四〕思ふ、悲しむ、喜ぶ、感歎す、心配すの如きは心のはたらきをあらはす語なり。

〔二五〕降る、咲く、吹く、散るの如きは自然のはたらきをあらはす語なり。

〔二六〕浮ぶ、傾く、動く、移轉すの如き、皆物事のはたらきをあらはす語なり。

すべて物事のはたらきをあらはす語を動詞といふ。

練習五

左の文より動詞を摘出せよ。

一　猫は鼠を捕へ、犬は夜を守る。
二　蠶は絲を吐き、蜂は蜜を釀す。
三　祝へ、祝へ、今日のよき日を。
四　月落ち、烏啼きて、霜天に滿つ。
五　家貧しうして、良妻をおもふ。
六　齒落ち、目かすみ、耳鳴る。
七　學を修め、業を習ひ以て智能を啓發し、德器を成就す。
八　姉は機を織り、妹は絲を紡ぐ。
九　幹事は會長の指揮を受けて、庶務を整理す。

第六章　副詞

〔二七〕
(イ) (1) 路狹し
(2) 路稍狹し
(3) 路甚だ狹し

(ロ) (1) 富士山を望む
(2) 近く富士山を望む
(3) 遙に富士山を望む

(イ)の例にて稍、甚だは下の形容詞狹しに副ひて其の狹さの度を一層明白にせり。(ロ)の例にて近く、遙には下の動詞の望むに副ひて、望む場所の遠近を更によく限定せり。

〔二八〕今、しばし、曾て、既にの如きは動詞又は形容詞に副ひて、時間の意味を限定する語なり。

〔二九〕茲に、何處にの如きは動詞又は形容詞に副ひて、其の

場所を限定する語なり。

〔三〇〕僅に、殆ど、甚だ、全く、大いにの如きは、動詞又は形容詞に副ひて、其の分量、度合を限定す。

〔三一〕必ず、豈、決して、いづくんぞ、恐らくは、願はくはの如きは動詞又は形容詞に副ひて、斷定、推量、願望等種種の意味をあらはす。

〔三二〕「いと靜かに聽く」、「最も忠實に勤む」の場合に於て、いとは靜かにに副ひて更に之を限定し、最もは忠實ににに副ひて更に之を限定せり。

動詞形容詞に副ひて其の意味を限定する語を副詞といふ。

副詞は又副詞に副ふことあり〔三二〕の場合の如し。

練習六

左の文より副詞を摘出せよ。

一　夫婦相和し、朋友相信ず。
二　今果して然り。
三　ゆる〳〵拜見致すべく候。
四　一度決心したることは必ず成し遂ぐべし。
五　はや我が汽車は離れたり。
六　しばし待ち給へ、尙いふべきことあり。
七　互に善を責むるは朋友の道なり。

練習七

左の空處に適當なる副詞を補へ。

一　圍を受くること六月、城○○陷る。
二　無用の者○○入るべからず。

三　君臣の分〇〇定まれり。
四　天は〇〇助くるものを助く。
五　いよ〳〵出でゝ〇〇奇なり。
六　物盛なれば〇〇衰ふ。
七　恩賜の御衣今〇〇に在り。

第七章　助動詞

〔三〕

書を讀ま
人を知ら
視れども見え
食へども其の味を知ら
　→ ず

書を讀む
六時に起く
必ず復習す
能く教を守る
　→ べし

右の例にて、ず　べしが、それ〳〵の動詞の下に附きて、其のはたらきを助くることを知るべし。これ等は獨立しては用ひぬ語にて、常に動詞の下に附屬して、あらはるゝものなり。

〔四〕

讀ま → ず　る　じ　ず　ん

讀み → たり　けり　き　ぬ　つ

讀む → べし　まじ　らん　なり

讀め → り

これ等もみな動詞の下に附きてそのはたらきを助くる語

なり。

動詞の下に附きて其のはたらきを助くる語を助動詞といふ。

（注意）助動詞は他の助動詞の下に附きて、いくつも相重なることを得。

練習八

左の文より助動詞を摘出せよ。

一　夏蟲水を知らず。
二　知らざるを知らずとせよ。
三　昔小野小町といふ歌人ありけり。
四　午前十時出頭すべし。
五　雲のいづこに月やどるらん。
六　未だ曾て知らざるなり。

七　今年も半ばは過ぎたり。

第八章　助詞

〔三五〕

杉・松・梅 ― の ― 枝・葉・木
月・花・雪 ― を ― 見る・愛す・ながむ
馬・犬・猫 ― に ― 與ふ・喰はしむ・似たり

の、を、には右に示す如く、それぐの語の下につきて、他の語との關係をあらはす語なり。

〔三六〕

(1)　樹の枝　　三つの柿
(2)　我が家　　君が代
(3)　三と二とを合すれば五となる

(4) 書を讀む　文を作る
(5) 先生に與ふ　六時に起く
(6) 西京へ行く　諸方へ通知す
(7) 西京より歸る　山より高し
(8) 九時まで勉强す
(9) 人か鬼か　言ふか言はぬか
(10) 豈圖らんや　誰か之を信ぜんや

これ等も皆語の下に附きて、他の語との關係をあらはす爲の語にして、此の類尚多し。大方は日常の口語にも用ふ。獨立して用をなさぬことは助動詞の如し。

助詞は他の語の下に附屬して、他の詞との關係を示す詞なり。

練習九

左の文より助詞を摘出せよ。

一　習ふより慣れよ。
二　東京より京都までは、十二時間を要す。
三　西へ西へ或は東へ東へと進めば、又元の出發點に歸る。
四　今か今かと安き心もなし。
五　花の顏、月の眉。
六　知らぬが佛。
七　紺屋の明後日。

第九章　接續詞

〔三七〕

月　又　花
山　又　川
年　又　月

毛筆　或は　鉛筆
爪　或は　牙
熱さ　或は　寒さ

右の如く、又、或はは語と語とを接續する役目をなす語なり。

〔三八〕

物窮すれば　又　通ず
山を越え　又　海を渡る

〔三九〕

敵は小勢なり　されども　侮り難し
地味は極めて豊なり　されども　氣候よろしからず

右の例にて又、されどもは單語ならざる稍長き語句を接續する役目をなせり。

上下の語句を接續する役目をなす語を接續詞といふ。

見ると聞くとは大なる相違なり
敵は小勢なれども侮り難し

右のと、どもの如きも、語句を接續する役目をなせり。然れどもこれ等は便宜上助詞として取扱ふ。

練習一〇

左の文より接續詞を摘出せよ。

一 生徒及び保證人控所。
二 何人も入場を許す、但し六歳以下は此の限にあらず、
三 歌文にも長ぜり。されども其の最もよくせるは繪書なりき。
四 徒歩にて行くか、或は馬にて行くべし。

第十章 感動詞

〔四〇〕あなかしこ
あはれ去年の今日は……
嗚呼忠臣楠子の墓

右の例のあな、あはれ、嗚呼の如きは感動したる時に不意に發する語なり。これ等の類を感動詞といふ。

〔四一〕うれしきかな。 樂しきかも

右の例のかな、かもの如きも、感動の意をあらはす語なり。然れどもこれ等は便宜助詞として取扱ふ。

第十一章 十品詞

〔四二〕これまで學び來れる詞の種類は名詞、代名詞、數詞、形容詞、動詞、副詞、助動詞、助詞、接續詞、感動詞にして、之を十品詞といふ。

〔四三〕十品詞の中、最初の三つを總稱して體言といひ、次の二つを總稱して用言といふ。即ち左の如し。

名詞―物事の名をあらはす語
代名詞―物事の名に代へて用ふる語
數詞―物事の數をあらはす語
（以上）物事の本體をあらはす語―體言

形容詞―物事の性質形狀等をあらはす語
動詞―主として物事のはたらきをあらはす語
（以上）物事の作用をあらはす語―用言

〔四四〕十品詞の中助動詞、助詞の二つは單獨にては意義をなさず、必ず他の語に附屬して用ふ。

〔四五〕第三四節を見よ。讀むの動詞は種々の助動詞に連るに際して、讀ま、讀み、讀む、讀め、と幾度も其の形を變化せり。一つの語のかく形を變化するを、語の活用といふ。

十品詞の中、動詞、形容詞、助動詞の三つは活用を有し、其

の他の七品詞は活用を有せず。即ち左の如し。

名詞
代名詞
數詞
副詞
接續詞
感動詞
助詞
（以上）活用せざる語

動詞
形容詞
助動詞
（以上）活用する語

語の活用に就きては次に之を學ぶべし。

練習一一

左の文に就きて、附線したる語の品詞の名を言へ。

天明卯年の凶作に、奧州の津輕、南部最も饑饉甚だしかりければ、足腰

の立つものは皆四方に走りて食物を求めけり。出羽の秋田は隣國の事なれば、饑人の來ること數萬人、然るに、秋田の地も亦凶作の事とて救助すること能はず、其の飢人又あふれて鶴岡に來りぬ。されば鶴岡は路頭は饑人にておし合ひ、へし合ひきとかや。さて、食を得ざるものは忽ち其の地にて餓死するによりて、鶴岡の人々は各身上の限り力を盡てし救ひけり。

第二篇　語の活用

第十二章　動詞の活用

〔四六〕

讀まず	落ちず
讀みたり	落ちたり
讀むべし	落つべし
讀めども	落つれども

讀む、落つの二つの動詞が助動詞、助詞の上に連る場合を見るに、右の如く相異なり。以て動詞の活用の一種のみならざるを知るべし。

其の一　四段にわたりて活用するもの

〔四七〕

讀 ― まみむめも

讀むの動詞は右の如く五十音のマ行の四段にわたりて活用すること、〔四六〕に示せるが如し。同一方法によりて、編む、飲むの動詞を檢せよ。亦同じくマ行の四段に活用するを知らん。

次に書くは如何。

書 ― かきくけこ

カ行の四段にわたりて活用す。　說く、　卷くも同樣なり。

次に押すは如何。

押 ― さしすせそ

サ行の四段に活用す。　落す、　ひたすも亦同じ。

次に打つは如何。

打 ― たちつてと

タ行の四段に活用す。　勝つ、　持つも同じ。

次に言ふは如何。

言 ― はひふへほ

問ふ、學ぶを檢せよ。

次に取るは如何。

取　ら　り　る　れ　ろ

賣る。刈るは如何。

〔四八〕かく五十音の行の四段に活用するものを四段活用の動詞といふ。此等は打消のずに連る時は、必ずァ段の音の處よりす。即ち讀ま、書か、押さ、打た、言は、取ら等の活用形よりするなり。

〔四九〕有りは打消を作る時にも有らずとなり、活用する形を見れば、同じくラ行の四段に活用せり。

取　ら　り　る　れ　ろ

有　ら　り　る　れ　ろ

然れども取るに於ては、取りにては言切ること出來ざるに、有りは「こゝに花あり」の如く、ありといひて言切ることを得。唯この點を異なりとす。

有りを、ラ行變格活用の動詞といふ。

〔五〇〕死ぬは死なずと、ァ列の音より打消を作ること四段活用に同じ。な、に、ぬ、ねの四段に活用するも相似たり。但し死ぬる人、死ぬれどもとも活用して、活用の形は四段活用よりも尚二つ多し。

死　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

死　な　に　ぬ　ね　の（ぬ　る　れ）

即ちぬの段に更にる、れを添へて、ぬる、ぬれの二活用形を得るなり。

死ぬをナ行變格活用の動詞といふ。

注意　ナ行變格活用には、此の外に往ぬといふ動詞あり。今の文には用ふること少し。

〔三一〕以上學べる所を概括していへば、五十音の行の四段にわたりて活用するものに三種あり。

(一)四段活用
(二)ラ行變格活用(有り)
(三)ナ行變格活用(死ぬ)

} 五十音の行の四段にわたりて活用す。

これなり。

注意一、四段活用は文語も口語も同じ。ナ行變格は口語

に於ては、地方により、全く四段活用と同じくなれり。

注意二、ありは存在を示す。動詞に存在を示すものあり。

練習一二

左の動詞を活用せよ。

たのむ　突く　濁る　乘る　拂ふ
走る　通る　通ふ　縫ふ

〔三二〕其の二　五十音の行の二段にわたりて活用するもの

(イ)	(ロ)
起きず	受けず
起くべし	受くべし
起くるなり	受くるなり

右の二つを比較せよ。

起くれども　　受くれども

起　かきくけこ　る　れ

受　かきくけこ　る　れ

打消に連る時、(イ)はイ段の處よりし、(ロ)はエ段の處よりする別あるのみ。他はすべて相同じ。即ち

(イ)はイ、ウの二段に活用し、更に其のウ段の音に、る、れを添へて活用す。

(ロ)はウ、エの二段に活用し、更に其のウ段の音に、る、れを添へて活用す。

〔五三〕　前と同じ方法にて、過ぐ、落つ、悔ゆ等の活用を檢せよ。

過　がぎぐげご　る　れ

落　たちつてと　る　れ

悔　やいゆえよ　る　れ

かくの如くイ、ウ二段に活用する動詞を上二段活用の動詞といふ。

尚左の動詞を檢せよ。

老ゆ　恨む　强ふ

〔五四〕　前と同じ方法にてとゞむ、投ぐ、載すの動詞を檢せよ。

止　まみむめも　るれ

投　がぎぐげご　るれ

載　さしすせそ　るれ

かくの如くウ、エ二段に活用する動詞を下二段活用の動詞といふ。

（注意）一、地方によりては、イとエとの發音を混同し、隨つて此の二種の活用を誤ること多し、注意を要す。

（注意）二、或地方を除く外、口語に於てはウ段に活用せず。

〔五五〕以上述べたる所を概括すれば、五十音の行の二段にわたりて活用するものに二種あり。

(一)上二段活用（イ、ウの二段に活用す）（五十音の行の二段にわたり）

(二)下二段活用（ウ、エの二段に活用す）て活用す。

練習一三

左の動詞の活用を示せ。

へだつ　備ふ　枯る　圍む　越ゆ　見ゆ
帶ぶ　流る　閉づ　盡く　知る　學ぶ
恐る　流す　流る　行く　當る　分く

〔五六〕其の三　五十音の行の一段にのみ活用するもの

（着）きず　きるべし　きれども
（蹴）けず　けるべし　けれども

着る、蹴るの如き動詞は五十音の他の段に活用することなく、唯る、れを添へたる活用形を有するのみ。

着
かきくけこ
る
れ

蹴
かきくけこ
る
れ

〔五七〕着るはイ段にるれを添へ、蹴るはエ段にるれを添ふる別あり。前者を上一段活用の動詞といひ、後者を下一段活用の動詞と稱す。

〔五八〕上一段活用に屬する動詞は着るの外、射る　鑄る　煮る　似る　干る　見る　惟みる　鑑みる　居る　率ゐる　あるのみ。

〔五九〕下一段活用には蹴るの一語あるのみ。

其の四　五十音の行の三段にわたりて活用するもの。

〔六〇〕勉強せず　　來(コ)ず
勉強したり　　來(キ)たり
勉強すべし　　來(ク)べし
勉強するなり　　來るなり
勉強すれども　　來れども

之を表にて示せば。

勉強
さしすせそ
る
れ

來
かきくけこ
る
れ

五十音の行の三段にわたりて活用するは相似たり。されども、上のはイ、ウ、エの三段、下のはイ、ウ、オの三段に活用することと異なり。其のウの段にる。れ。を添ふることは二段活用の語に似て、いづれも五つの活用形を有せり。

上のをサ行變格活用といひ、下のをカ行變格活用といふ

〔六一〕サ行變格活用の動詞は元來す(爲)の一語あるのみ。但し「罪す」「ゆあみす」「詳にす」「明にす」「辱くす」の如く、他の品詞より動詞を作る時は皆此の活用による又漢語、外國語の國語動詞となるものも、皆此の活用によるを以て、今日にては甚だ大切なる動詞なりと知るべし。

〔六二〕カ行變格活用はく(來)の一語あるのみ。

〔六三〕是に於て動詞の活用には九つの種類あることを知る。

動詞

- 四段にわたりて活用するもの
  - 四段活用
  - ラ行變格活用(一語)
  - ナ行變格活用(一語)
- 二段にわたりて活用するもの
  - 上二段活用
  - 下二段活用
- 一段のみに活用するもの
  - 上一段活用(十一語)
  - 下一段活用(一語)
- 三段にわたりて活用するもの
  - サ行變格活用(漢語及び他の品詞より動詞となるものを除けば一語)
  - カ行變格活用(一語)

練習一四

附線を施したる動詞の活用の種類を擧げよ

1 學年は毎年四月に始りて翌年三月に終る。

2 門前の小僧習はぬ經を讀む。
3 身をつめりて人の痛さを知れ。
4 心こゝにあらざれば聽けども聞えず、視れども見えず、食へども其の味を知らず。
5 近年此の方面の研究は大に進歩せり

第十三章　形容詞の活用

〔六四〕水清く流る
川の水清し
清き水に洗ふ
水清けれは魚すまず

形容詞にも活用あること、これにて明なり。其の活用は動詞の如く五十音の一行に止らずして、カ行とサ行とに跨れり。

清 ─ かきくけこ ─ れ
　 ─ さしすせそ

〔六五〕形容詞には右に示せる如く、く、し、き、けれの四つの活用形あり。赤し、白し、長し、短し、重し、輕し等の語を活用せしむれば、皆相同じ。

1	赤く	白く	長く	短く	重く	輕く
2	赤し	白し	長し	短し	重し	輕し
3	赤き	白き	長き	短き	重き	輕き

4 赤けれ 白けれ 長けれ 短けれ 重けれ 輕けれ

〔六五〕 く、き、けれとカ行の活用をなす時、上にしの音を有して
しく、しき、しけれとなる形容詞あり。かゝる場合には
(2)のしの活用にはしを重ねざるものとす。涼し、惡し
くやし、長々しなど皆之に屬す。

1 涼しく 惡しく くやしく 長々しく
2 涼し 惡し くやし 長々し
3 涼しき 惡しき くやしき 長々しき
4 涼しけれ 惡しけれ くやしけれ 長々しけれ

〔六六〕 すべて形容詞は(1)の「く」の活用形よりラ行變格の動詞
ありに連りて、

善 よから よかり よかる よかれ
惡 あしから あしかり あしかる あしかれ

と活用す。其の活用形は全くラ行の變格に同じ。

よく（か）あ ─ ら／り／る／れ

あしく（か）あ ─ ら／り／る／れ

〔六七〕 かく活用せる形容詞を形容動詞といふ。
「詳に」「立派に」「突然に」「滔々と」などは、に、とよりあり
に連りて詳なり、立派なり、突然たり、滔々たりの如
く、形容動詞をなす。

(注意) 「正成は忠臣なり」「父父たり」の如く、名詞よりな
り、たりにつゞく場合と混同すること勿れ。

練習一五

左の形容詞を活用せしめよ。

正し　恐し　久し　いやし
淡し　貴し　甘し　辛し
太し　冷たし　重々し　辱し

練習一六

左の文より形容動詞を作れ。

高し　巍然と

練習一七

左の文より形容動詞を摘出せよ。

1　通路の不便少からず。
2　花の美なるもの匂必ずしもよからず。

3　健全なる精神は健全なる身體に宿る。
4　寒からず暑からず、今は最好の時節。
5　人の體温は三十七度内外なれば、大方それより高かるべからず、低かるべからず。

第十四章　動詞の活用形

其の一　終止形と連體形

[六八]
(四)書を讀む　讀む人
(ラ變)人あり　ある人
(ナ變)犬死ぬ　死ぬる犬
(上二)柿落つ　落つる柿
(下二)火燃ゆ　燃ゆる火
(上一)花を見る　見る人

(下一)まりを蹴る　　蹴る人
(サ變)お花勉強す　　勉強するお花
(カ變)客來(く)　　來る客

上のは物を言切る活用形にて終止形といひ、下のは名詞代名詞即ち體言に連る活用形なれば、連體形といふ。

〔六九〕前項を見ても知るべき如く、四段、上一段、下一段の動詞は終止形と連體形と其の形同じけれども、他は皆異なり。然るに口語にては、大抵の地方に於て此の區別なくなれり。隨つて之を混用することあり。

(注意)「に」につゞく形を連體形と記憶すべし。「に」のみならず、大抵の助詞には連體形よりつゞくものなり。

練習一八

動詞の活用形に誤あらば正せ。

1 才智なき時は身を立つこと能はず。
2 疾病流行して死ぬもの多し。
3 品物に手を觸ることを禁ず。
4 妻戀ふ鹿の鳴く音あはれなり。
5 流る涙瀧の如し。
6 大は小を兼ぬる。

〔七〇〕其の二　未然形と已然形

(四)花咲かば告げん　　花咲けば告ぐ
(ラ變)人あらば知らん　　人あれば知る
(ナ變)死なば悲まん　　死ぬれば悲しむ
(上二)柿落ちば拾はん　　柿落つれば拾ふ
(下二)火燃えば消さん　　火燃ゆれば消す

(上一)花を見ば嬉しからん　花を見ればうれし
(下一)まりを蹴ば疲れん　まりを蹴れば疲る
(サ變)勉强せば勝たん　勉强すれば勝つ
(カ變)來らば逢はん　來れば逢ふ

上のは未だ起らざる事件をあらかじめいふもの、下のは已に起りたりと定めていふもの、上のを未然形といひ。下のを已然形といふ。口語にていへば「花が咲いたら」「花が咲くなら」は未然形にして「花が咲けば」は已然形なり。

〔十二〕口語にては未然形、已然形の區別甚だ微弱となれり。「花が咲けば」といふ形を未然形にも用ふること多し。

(注意)んにつゞく形を未然形、どもにつゞく形を已然形と記憶すべし。

練習一九

動詞の活用形に誤あらば正せ。

1 風吹けば浪立たん。
2 磨けば光らん。
3 聽かば面白し。
4 人をのろへば穴二つ。
5 君行かば我もゆく。

〔十三〕其の三　連用形

(四)咲き始む　花咲き、鳥歌ふ
(ラ變)世にあり難し　鳥あり、未だ鳴かず
(ナ變)死に損ふ　馬死に、人助かる
(上二)落ち込む　水落ち、石出づ
(下二)燃え上る　火燃え、灰殘る

(上一)見終る　花を見、歌をよむ
(下一)蹴飛ばす　まりを蹴、弓を射る
(サ變)勉強し盡す　今日勉強し、明日勉強す
(カ變)來にくし　昨日は來、今日は來ず

上段の例を見よ。すべて用言(動詞、形容詞)につゞく活用形なり。故に連用形と名づく。連用形は文の中にて中止する形にも用ふ。下の段の例を見て知るべし。

(注意)他の動詞につゞく形を連用形と記憶すべし。

其の四　命令形

〔七三〕(四)咲け花よ
(ラ變)我に幸あれ
(ナ變)早く死ね
(上二)落ちよ落ちよ
(下二)燃えよ燃えよ
(上一)あれを見よ
(下一)まりを蹴よ
(サ變)よく勉強せよ
(カ變)明日來よ

これはすべて命令する形なれば命令形といふ。四段、ラ變ナ變の外は皆よの助詞を附して始めて命令形をなすことに注意せよ。

第十五章　形容詞の活用法

〔七四〕水清し　清き水

上のは終止形、下のは連體形なり。動詞の場合と違ひて、少しも紛ふ恐なし。

〔七五〕水清くば洗はん　水清ければ洗ふ

上のは未然形、下のは已然形なり。

〔七六〕水清く澄めり　水清く草青し

連用形にして中止にも用ゐること、動詞に同じ。

〔七七〕

水清かり(終止)　清かる水(連體)

清からば洗はん(未然)　清かれども洗はず(已然)

清かりけり(連用)　清かれ(命令)

形容動詞も亦右の如く活用形を有す。

(注意)形容動詞には命令形あれども、形容詞にはなし。

第十六章　助動詞の活用

〔七八〕助動詞の中には下二段活用に等しき活用をなすものあり。ラ行變格に等しき活用をなすものあり。又は形容詞の如き活用をなすものあり。特に變體なる左の二語に注意せよ。

(き)雨降りき(終止)・昨日降りし雨(連體)

雨降りしかども(已然)

(ず)雨降らず(終止)　永く降らぬ雨(連體)

雨降らずば(未然)　雨降らねば(已然)

(注意)ずの終止と未然とは同形なり。

第十七章　用言と助動詞の連結

其の一　時のあらはし方

〔七九〕

1 雨降る(現在)

動詞
- 2 雨降りたり(現在完了)
- 3 雨降りき(過去)
- 4 雨降らん(未來)
- 5 雨降りたりき(過去完了)
- 6 雨降りたらん(未來完了)

(1)は動作の時間をいふ必要なき場合、又は現在の時を示す場合なり。此の時には何等の助動詞を取らず。(2)は動作の今正に終れることを示す。(3)は動作の過去に終りしことを示す。(4)は動作の未來に起るべきことを示す。(5)は過去の或時に於て動作の已に終りたることを示す。(6)は未來の或時に於て動作の終れることを示す。それ〴〵の名稱ある所以なり。

〔八〇〕ぬ、りは現在完了の時をあらはす助動詞にして略たりに同じ。

〔八一〕けりは過去の時をあらはす助動詞にして略きに同じ。

其の二　推量義務等のあらはし方

〔八二〕前課に於ては時の言ひあらはし方を學べり。そは唯動作をありのまゝに述べて、動作の時間を明瞭にしたるのみ。「讀むだらう」「讀む筈だ」の如き推量、義務等をあらはすには、法の助動詞と連結せざるべからず。

〔八三〕べしの助動詞は種々の意義を附加す

1 讀むべし　讀むだらう　推量の法
2 讀むべし　讀むはずだ　義務の法
3 讀むべし　讀むことが出來る　能力の法
4 讀むべし　讀め　命令の法

(注意)(1)推量の法にはなるべしを用ふることあり。
(2)命令の法は動詞の活用形にても言ひあらはし得れども、(〔七三〕參照)助動詞を附けても言ひあらはし得るなり。
(3)らんも推量の法を示す助動詞なり。

其の三　打消のあらはし方

〔八四〕第十五章、第十六章に學べる所は、いづれも動詞を肯定にいふ場合なり。否定即ち打消を示すにはず又はざりの助動詞を用ふ。

讀む　肯定
讀まず
讀まざり　否定

其の四　使役受身等のあらはし方

〔八五〕時のあらはし方以下三課に學べる所は動作をなす方に就きての種々の用法なり。然るに、「人にうたる」といへば、動作を被る(受身)こととなり、「人にうたしむ」といへば、人を動作せしむる(使役)こととなる。

1 (通常)打つ　自ら打つ
2 (受身)打たる。　人に打たれる

3（使役）うたす　　人に打たせる
うたしむ
4（使役の）うたせらる　　人に打たせられる
（受身）うたしめらる

（注意）受身の形は亦能力の法を示すにも用ふ。

其の五　敬語のあらはし方

〔八六〕見らる　（受身）
見さす　（使役）
見させらる　（使役の受身）

〔八七〕右はいづれも敬語としても用ふ。

見給ふ　　見侍り
聞き給ふ　聞き侍り

給ふ、侍りの如きも亦敬語の助動詞として用ふ。但し同じ敬語の中にも、先方を敬ひて言ふ場合と、自ら謙りていふ場合との區別あることを知らざるべからず。

〔八八〕「おはします」「見そなはす」「知ろしめす」の如き初より敬語にのみ用ふる動詞あり。これ等は助動詞の助をかることを要せず。

（注意）名詞にも形容詞にも副詞にもおん、御等を附加へて敬語を作ること多く、代名詞にも特殊の敬稱尠からず。これ我が國語の一特質なり。

其の六　其の他の助動詞

〔八九〕なりの助動詞の推量をあらはす時に用ふることは前にいへり。この助動詞は勢を強め、又は指定する意味を有するものにて、如何なる連結の下にも用ひ得べし。

讀むなり。

讀みたるなり。

讀ましむるなり。

讀まざるなり。

讀ませられざるべきなり。

〔九〇〕正成は忠臣なり。

三つと二つとの利は五つなり。

舜も人なり。我も人なり。

この助動詞は右の如く體言の下にもつゞくものとす。

〔九一〕父父たらざれども子子たり。

これは何たることぞ

このたりは體言にのみ續きて、用言につゞかず。されども便宜上助動詞として取扱ふなり

實際を見る如し

〔九二〕花の如し

天女を見るが如し

右の如く如しはのがの助動詞の下にもつゞく。されども便宜上助動詞として取扱ふなり。

〔九三〕〔八九〕の例にても明かなる如く、助動詞は二つにも、三つにも必要に應じて連ることを得。

讀ましむ

讀まれたり

讀まれしなり

左の例の如きは最も多く連りたる場合なり。

讀ましめられ給ひしなるべし

（使役　受身　敬語　時　指定　推量）

〔九四〕遠くは行かじ。

聞きても分るまじ。

何かと思ひけん。

じ、まじは推量と打消とを兼ねたる助動詞、けんは推量と過去とを兼ねたる助動詞なり。

練習二〇

書くの動詞に、左の助動詞を種々に連結せよ。

る（受身）　ざり（打消）　けん（過去、推量）

けり（時）　給ふ（敬語）

新定女子文典上卷 終

動詞活用形一覽（第十四章參照）

動詞＼活用形		終止	連體	未然	已然	連用	命令
四	書	書く	書く	書か	書け	書き	書け
ラ變	有	有り	有る	有ら	有れ	有り	有れ
ナ變	死	死ぬ	死ぬる	死な	死ぬれ	死に	死ね
上二	起	起く	起くる	起き	起くれ	起き	起き
下二	受	受く	受くる	受け	受くれ	受け	受け
上一	着	きる	きる	き	きれ	き	き
下一	蹴	ける	ける	け	けれ	け	け
サ變	爲	す	する	せ	すれ	し	せ
カ變	來	く	くる	こ	くれ	き	こ
							よ

形容詞(及び形容動詞)活用形一覧(第十五章參照)

形容詞＼活用形	終止	連體	未然	已然	連用	命令
善し	善し	善き	善く	善けれ	善く	
惡し	惡し	惡しき	惡しく	惡しけれ	惡しく	
善かり	善かり	善かる	善から	善かれ	善かり	善かれ
突然たり	突然たり	突然たる	突然たら	突然たれ	突然たり	突然たれ

主要助動詞活用形一覽（第十六章參照）

助動詞＼活用形	終止	連體	未然	已然	連用	命令	
（る	（る	るる	（れ	（るれ	（れ	（れ	下二段に等しき活用
らる	らる	らるる	られ	らるれ	られ	られ（よ）	
（す	（す	する	（せ	（すれ	（せ	（せ	
さす	さす	さする	させ	さすれ	させ	させ（よ）	
しむ	しむ	しむる	しめ	しむれ	しめ	しめ（よ）	
なり	なり	なる	なら	なれ	なり	なれ	ラ行變格に等しき活用
たり	たり	たる	たら	たれ	たり	たれ	
り	り	る	ら	れ	り		
べかり	べかり	べかる	べから	べかれ	べかり		
めり	めり	める		めれ	めり		
べし	べし	べき	べく	べけれ	べく		形容詞に似たる活用
まじ	まじ	まじき	まじく	まじけれ	まじく		
如し	如し	如き	如く		如く		
らん	らん	らん		らめ			
けん	けん	けん		けめ			
き	き	し	せ	しか	し		
ず	ず	ぬ	ず	ね	ず		

動詞活用の對照表

	四段	ラ變	ナ變	上二	下二	上一	下一	サ變	カ變
文語の活用	書 か き く け	有 ら り る れ	死 な に ぬ ね ぬる ぬれ	起 き く くる くれ	受 け く くる くれ	着 き きる きれ	蹴 け ける けれ	爲 せ し す する すれ	來 こ き く くる くれ

	四段	四段	四段	上一	下一	上一	下一	サ變	カ變
口語の活用	書 か き く け	有 ら り る れ	死 な に ぬ ね	起 き きる きれ	受 け ける けれ	着 き きる きれ	蹴 け ける けれ	爲 せ し する すれ	來 こ き くる くれ

新定女子文典下巻目次

第三篇　文の構造

第十八章　主語、述語……一
練習二一……四
第十九章　叙述の種類……五
其の一、動詞の述語となる場合……五
練習二二……一〇
其の二、形容詞又は如しの述語となる場合……一一
其の三、たり、なり、又は助詞の述語となる場合……一二
練習二三……一三
第二十章　文主……一四
第二十一章　文の要素の節略……一六

第二十二章　修飾語……一八
第二十三章　單文……二〇
練習二四……二六
第二十四章　複文……二七
第二十五章　重文……二九
練習二五……三一
第二十六章　文の性質上の分類……三二
第二十七章　係結の法則……三三
練習二六……三七

第四篇　正誤篇

第二十八章　假名遣……三九
練習二七……四八

第二十九章　用言活用の誤……四九
練習二八……五一
第三十章　用言と助動詞との連結の誤……五二
練習二九……五八
第三十一章　助詞の誤……五九
練習三〇……六五
第三十二章　係結の誤……六七
練習三一……六七
附錄　文法上許容に關する事項……六九

新定女子文典下卷目次 終

新定女子文典　下卷

文學博士　芳賀矢一著

第三篇　文の構造

第十八章　主語、述語

〔九五〕單語集りて文を成す。文典上の文とは單語の集りて纏りたる思想をいひあらはしたるものをいふ。

(イ)玉琢かざれば　(ロ)器とならず

(イ)(ロ)ともに單語の集りたるものなれども、未だ文と稱すべ

からず(イ)(ロ)を合せて、

玉琢かざれば器とならず。

といふにいたりて、始めて一つの纏りたる思想をあらはして、文となる。

〔九六〕凡そ文には其の題目となるものあり。其の題目に就いて何事かを叙述す。文こゝに於て成る。例へば、犬、花に對して「走る」「散りたり」の如き叙述あり。「犬走る」「花散りたり」といふ文をなす。文の題目となるものを主語といひ、文の叙述をなすものを述語といふ。故に文の最も簡單なる形に於ても、少くとも一つの主語と一つの述語とを含まざるべからず。右の例にていへば、犬、花は主語にして走る、散りたりは之に對する述語なり。

〔九七〕主語と述語との關係、即ち叙述には三つの種類あり。口語にていへば、

(一)何がどうする。
(二)何がどんなだ。
(三)何が何だ。

〔九八〕「何がどうする」といふ關係を示す場合には、動詞其の述語となる。「犬走る」「花散りたり」の如きこれなり。

〔九九〕「何がどんなだ」といふ關係を示す場合には、形容詞又は助動詞の如し其の述語となる。

例、水清し。
月明かなり。
月銀の如し。

〔一〇〇〕「何が何だ」といふ場合には、助詞のなり、たり(〔九〇〕〔九一〕參照)又は助詞、其の述語となる。

例、日本は神國なり。　東京は日本の都たり。

これは何の花ぞ。　鯨は魚か。

(注意)此の場合に於て、日本、東京、これ、鯨等の主語に對する叙語は、むしろ其の下に來る神國、都、花、魚等なりといふべし。然れども文の構造の上の説明としては、なり、たり、の助動詞ぞ、かの助詞を述語と見做し置くを便利とす。〔九八〕如しの場合も同様なり。

練習二一

次の文の主語、述語を問ふ。

1. 日本は小供の樂園なり。
2. 光陰矢の如し。
3. 仁者は山を樂しむ。
4. 孔子は聖人なり。
5. 美しき虹西方に現る。
6. 惡錢身につかず。
7. 滿は損を招く。
8. 汽車は電車よりも遲し。
9. 井の中の蛙大海を知らず。
10. 忠臣は孝子の門に出づ。

第十九章　叙述の種類

其の一　動詞の述語となる場合

〔一〇一〕月　出づ。

鶯　鳴く。

此の二文は述語のみにて「何がどうする」といふ關係の叙述十分なり。

〔一〇二〕子　似る。

氷　なる。

此の二文は述語の動詞のみにては「子が何に似るか」「氷が何になるか」明瞭ならず。

子　母に　似る。

氷　水と　なる。

の如く「何に」「何と」の如き問に對する語を加へて、叙述始めて完全す。

〔一〇三〕母　泣かる。

實朝　殺さる。

敵　退却せしめらる。

右の諸文も此の儘にては、「何にどうせらるゝか」分明ならず。泣くもの、殺すもの、退却せしむるもの、他に無かるべからず。

母　子に　泣かる。

實朝　公曉に　殺さる。

敵　我が軍に　退却せしめらる。

として、叙述始めて完全となる。

〔一〇四〕義經　討つ。

猿　落す。

我が軍　退却せしむ。

右の諸文此の儘にては「何をどうするのか」不分明なり。

義經　平氏を　討つ。

猿　柿を　落す。

我が軍　敵を　退却せしむ。

として始めて明白なり。

〔一〇五〕教師　授く。

賴朝　討たしむ。

米人　定む。

以上の文も此の儘にては「何がどうする」の關係理解し難し。「教師は何を授くるか」「賴朝は何を討たしむるか」「米人は何を定むるか。」

教師　文法を　授く。

賴朝　平氏を　討たしむ。

米人　華盛頓を　定む。

や、明白になりたれども「教師は文法を誰に授くるか」「賴朝は誰に平氏を討たしむるか」「米人は華盛頓を何と定むるか」これ等の問を充實するに非れば、叙述の關係未だ十分にいひあらはされたるに非ず。

教師　生徒に　文法を　授く。

賴朝　義經をして　平氏を　討たしむ。

米人　華盛頓を　大統領と　定む。

として叙述完全す。

〔一〇六〕以上述べたる如く、〔一〇二〕以下は皆それぐの語を補ひて叙述を完全ならしめたるなり。

述語の意義を補ひて叙述を完全ならしむる語を補語といふ。

(注意)補語はを、に、より等の助動詞によりて導かるゝこと多し。就中動作の最も近く及ぶものを、をにて導くなり。

練習二二

左の文につきて、動詞の叙述を助くる補語を摘出せよ。

1. 猫鼠を捕ふ。
2. 能ある鷹は爪をかくす。
3. 下女餅をやく。
4. 旅人路を巡査に問ふ。
5. 父財産を太郎と次郎とに譲る。
6. 姉は母に育てられ、妹は乳母に育てらる。
7. 雀海中に入りて蛤となる。
8. 西洋人は薔薇を花の王といふ。
9. 荷物を馬車に載す。
10. 二月十一日を紀元節と定め給ふ。

其の二　形容詞又は如しの述語となる場合。

〔一〇七〕水清し。

月明かなり。

右等は述語のみにて叙述十分なる文なり。

〔一〇八〕六は多し。

琵琶湖は　大なり。

右にても叙述をなせども、

六は　三より多し。

琵琶湖は　中禪寺湖より　大なり。

といふ場合とは、叙述の意味全く異なり。

〔一〇九〕月　如し。

容貌　如し。

如しの述語たる場合には補語なくしては叙述全く不分明なり。（一〇〇注意參照）

月　弓の　如し。

容貌　愚なるが　如し。

其の三　たり、なり、又は助詞の述語となる場合。

〔一一〇〕正成は　なり。

東京は　たり。

にては「何が何だ」の關係一向分らず。

正成は　忠臣　なり。

東京は　大都會　たり。

の如く、補語を加へざるべからず。（一〇〇注意參照）

〔一一一〕これは　梅の花　か。

あの魚は　何　ぞ。

か、　ぞの助詞を述語と見做すを以て、梅の花、何の補語を加へて、「何が何だ」の關係明瞭になるなり。

練習二三

左の文中につきて叙述を助くる補語を摘出せよ。

一、日月は流るるが如し。

2. 不義の富は浮雲の如し。

3. 時は金なり。

4. 蝙蝠は鳥なりや、獸なりや。

5. 筆は劍よりも鋭し。

6. 海水は河水よりも重し。

第二十章　文主

〔一二〕性質音樂に適す。

右の文の性質は主語にして、適すは述語なり。今之を

　お花は性質音樂に適す。

とせんか、「性質音樂に適す」といふ文の全體を述語として、お花は其の主語たるが如き觀あり。我が國の文にはかくの如き形式を有するもの少からず。特に全文の題目を取出して、それに就いての敍述をなすなり。かく用ひたる題目を文主といふ。

〔一三〕兎は耳長し。

　東京は人口多し。

耳の主語に對して長しの述語あり。其の文主は兎なり。人口の主語に對して多しの述語あり。其の文主は東京なり。之を口語にていへば、

　兎は耳が長い。

　東京は人口が多い。

文主ははゝ主語はがを伴ふことに注意せよ。

第二十一章　文の要素の節略

（一二四）文の主語、述語、補語、文主等は文を組立つるに大切なる部分なれば、文の要素ともいふべし。然れども都合によりては之を省略すること亦珍しからず。

車馬を乘入るべからず。

枝を折るべからず。

の如き命令文には、主語を省くこと常なり。

詔して家毎に孝經一本を藏せしむ。

賴朝を征夷大將軍に任ず。

明後日參上致すべし。

など皆主語を省ける例なり。國文には主語を省ける例極

めて多し。

（一二五）伏して冀くは御購求あらんことを。（乞ふ）

塵もつもれば山。（となる）

牛に引かれて善光寺參り。（をする）

勉强は幸福の母。（なり）

これ等は述語を省きたる例なり。

（一二六）（友を）待てども〳〵來らず。

昨年より繪畫を（誰先生に）學べり。

（人より）貰ふものは夏も小袖。

これ等は補語を省略せる例なり。

第二十二章 修飾語

〔一一七〕文には文の要素の外、文の要素を形容し、或はその意味を限定するに用ふる語あり。之を修飾語といふ。

〔一一八〕左の例により、最も簡單なる文が種々の修飾語を加へて次第に複雜になりゆく樣を知るべし。

1. 猫鼠を捕ふ。
2. 小き猫大なる鼠を捕ふ。
3. 小き黑毛の猫大なる白き鼠を捕ふ。
4. 禪寺の小き黑毛の猫緣の下の白き鼠を捕ふ。
5. 禪寺の甚だ小き黑毛の猫緣の下の極めて大なる白き鼠を巧に捕ふ。
6. 隣の禪寺の甚だ小き黑毛の猫緣の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。
7. 此の頃時々隣の禪寺の甚だ小き黑毛の猫わが家の緣の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。

右の如く修飾語の上に修飾語を加ふれば、尙いくらにても附加するを得べし。然れども實際の文には、かくの如き多くの修飾語を添ふること、稀なり。

〔一一九〕前項の例を圖示すれば、

甚だ(5)　小き(2)　極めて(5)　大なる(2)

黑毛の(3)　白き(3)

最も(6)　巧に(5)

猫　鼠を　捕ふ

隣の(6)禪寺の(4)

わが家の(7)縁の(4)下の

此の頃(7)
時々(7)

第二十三章　單文

〔三〇〕1. 猫鼠を捕ふ。

2. 隣の禪寺の小き黒毛の猫縁の下の甚だ大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。

右の二文は長さに於ては非常に相違あれども、主語は猫。述語は捕ふ。「何がどうする」といふ關係、即ち主語と述語との關係は唯一回成立したるのみ。後者は修飾語を加へて、文の形の複雜になれるに過ぎず。

〔三一〕猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎は哺乳獸なり。

此の文には主語は猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎の八つあり。之を書分けて別々の述語を有せしむれば、

猫は哺乳獸なり。
鼠は哺乳獸なり。
狐は哺乳獸なり。
馬は哺乳獸なり。
牛は哺乳獸なり。
象は哺乳獸なり。
獅子は哺乳獸なり。
虎は哺乳獸なり。

の八文となる。然るにこゝには之を引纏めて、八つの主語に一つの共同述語を有せしめたるなり。即ち

猫
鼠
狐
馬
牛
象
獅子
虎
（主語）は哺乳獸なり。（述語）

にして「何と何と何とが何だ」といふ關係を示せり。

〔三〕農夫は耕作し、收穫し、租税を納む。

右の文の主語は一つにして、述語は耕作す、收穫す、納むの三

つあり。之を書分くれば、

農夫は耕作す。

農夫は收穫す。

農夫は租税を納む。

の三文となる。然れどもこゝには之を引纏めて、共同の主語を有せしめたるなり。即ち

農夫は（主語）
耕作し、
收穫し、
租税を納む。（述語）

にして、此の關係は「何がどうして、どうして、どうする」なり。

〔三〕余は學校にて修身、國語、英語、理科、裁縫、家事、圖畫、唱歌を學ぶ。

右は多くの補語を有する場合にて、之を表示すれば、

余は（主語）
　修身
　國語
　英語
　理科
　裁縫
　家事
　圖畫
　唱歌
（補語）を學ぶ（述語）

なり。

〔二四〕お花は英語を伊藤先生に質問し、音樂を山本先生に受け、習字を白井先生に學ぶ。

これは補語、述語ともに二つ以上を有する文の例なり。

お花（主語）
　英語を―伊藤先生に―質問し、
　音樂を―山本先生に―受け。
　習字を―白井先生に―學ぶ。
（述語）

〔二五〕姉と妹とはともに機を織り、絲を紡ぐ。

これは共同主語が共同述語を有する例なり。

姉
妹
（主語）
　機を　織り
　絲を　紡ぐ
（述語）

「何と何とがどうして、どうする」といふ關係なり。

〔二六〕〔一二一〕より〔一二五〕までの例を見よ。主語、述語補語の數の多少に係らず。主語と述語との關係は文法上の形式、即ち文を構成する形式に於ては、いづれも唯一回成立せるものなり。

かくの如く主語と述語との關係、文法上の形式に於て唯一回成立せるものを名づけて單文といふ。

練習二四

左の單文の主語、述語を問ふ。

1. 虎の性質は猫に似たり。
2. 滿堂の紳士淑女皆泣けり。
3. 木曾山には檜杉松等の良材多し。
4. 動物は互に生存を競爭し、或は居處を爭ひ、或は食物を爭ふ。
5. 余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る。
6. 父母や我を生み、我を養ひ、我を長ぜしめ、我を敎ふ。
7. 木々の綠も、浮べる雲も、秀づる山も、流るる溪も、峙つ崖も、吹き來る風も、日の光も、鷄の聲も、空の色も、皆自ら憂世のものにあらず。

第二十四章　複文

〔三七〕1. 秋風吹く。

2. 猫鼠を捕ふ。

3. 余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る。

右等はいづれも單文なり。

1. 「秋風吹け」ば……
   「秋風吹け」ども……
   「秋風吹く」時……

2. 「猫鼠を捕ふれ」ば……
   「猫の鼠を捕ふる」に……
   「猫の鼠を捕ふる」方法……

3. 「余は六時に起き、八時學校に出で家に歸る」が……
「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸る」を
「余が六時に起き、八時學校に出で正午家に歸る」習慣……

かくの如く文が助詞に連り、又は體言に連りて、更に大なる文の一部分となることあり。かゝる場合には其の文は獨立を失ふを以て之を句と稱す。

文の獨立を失ひて、他の文の一部分となれるものを句といふ。

〔二八〕1. 月滿つれば缺く。
2. 詩人は「秋風の吹く」を悲しむ。

右の二文中(1)は「何がどうして、どうする」といふ關係、一回のみ成立する故單文なり。(2)は「何が『何のどうする』のをどうする」といふ形式にて、文の中に獨立を失ひたる文即ち句を含めり。かくの如く文の中に句を含める文を名づけて複文といふ。

一つ以上の句を含みて、主語と述語との文法上の關係二回以上成立せるものを複文といふ。

〔二九〕正成答へて「陛下願はくは御心を安んじ給へ」と奏す、右の如く獨立せる單文を含めるものも亦複文なり。

第二十五章 重文

〔三〇〕秋風吹く。 木の葉落つ。

猫鼠を捕ふ。犬夜を守る。

右は四つの單文なり。

「秋風吹け」ども、木の葉落ちず。

「猫鼠を捕ふれ」ども、犬夜を守らず。

右の如くいへば、二箇の複文を生ずること、前章に學べるが如し。

秋風吹き、木葉落つ。

猫は鼠を捕へ、犬は夜を守る。

右の如くいふ時は上の文は獨立を失ひて、更に大なる文の一部分となることは、句の場合に似たり。然れども此の場合には上の文は下の文の附屬とならず。下の文と相對して同等に併立せり。

かくの如く文中にありて同等に並立するものを**文の節**といひ、二箇以上の節を含む文を**重文**といふ。

〔三〕春來れども花咲かず、秋立てども葉落ちず。

右の各文節は複文なり。複文を重ねたるものも亦重文なり。

練習二五

左の文の單文、複文重文を區別せよ。

1. 艱難汝を玉にす。
2. 水清ければ魚すまず。
3. 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。
4. 謙信兵を率ゐて川中島に陣す。
5. 樹靜ならんと欲すれども、風やまず。
6. 隣の家に藏が立てば、こちらにては腹が立つ。

第二十六章　文の性質上の分類

〔二三二〕紫式部は古今の才媛なり。
地球は一年を以て太陽を一周す。
かくすなほに叙述したる文を平叙文といふ。

〔二三三〕三と三との和幾何。
誰か烏の雌雄を辨ぜん。
いつくんぞ然らん。
右等の如く、疑問文又は反語の意を含むやうに書きたるを疑問文といふ。

〔二三四〕人の短をいふこと勿れ。
辨當持參にて來れ。

人のふり見てわがふり直せ。
右等の如く、命令の意を示すやうに書きたるものを命令文といふ。

〔二三五〕嗚呼悲しきかな。
歎ずべきかな。
右の如く感動の意を示すものを感動體の文といふ。

〔二三六〕余等は平叙文のみにて、何事をもいひあらはし得べし。然れどもかくては單調を免れず。此の四體の文を混用して、文章の變化をなすなり。これ語の妙用なり。

第二十七章　係結の法則

〔二三七〕普通の順序によれば、述語は文の最後に來るものとす。

但し其の結び方は、文體によりて異なり。

正成は忠臣なり。

これぞ夫の一大事なる。

吹き來る風なんなまぐさき。

我こそは無官の大夫敦盛なれ。

人こそ知らねかわく間もなし。

以上はいづれも平叙文なり。平叙文の結方に就いては左の事を記憶すべし。

(一)上にぞ、なんの助詞ある時に限り、述語は連體形を以て結ぶ。

(二)上にこその助詞ある時に限り、述語は已然形を以て結ぶ。

これは梅の花か。

舜は何人ぞ。

霞か雲かはた雪か。

之を知らぬ人やある。

誰か之を信ぜん。

以上はいづれも疑問文なり。疑問文にては、ぞ、や、かの如き疑問の助詞を以て結ぶこと多し。然らずして述語の用言(若しくは助動詞)最後にあらはるゝ時は、連體形を以て結ぶものとす

〔三八〕知らざるを知らずとせよ。

枝を折るな。

涙あるものは泣け。

己の長をいふこと勿れ。

右はいづれも命令の文なり。命令の文にてはよ、なの如き命令の助詞最後に來るか、然らざれば命令形を以て結ぶなり。

但し可しはもと推量の助動詞より、轉じて命令の意をいふやうになれるものなれば、こは尙終止形にて結ぶべし。

例　師の教を奉ずべし。父母の命に背くべからず。

〔一三九〕嗚呼悲しいかな。

感動體の文にては、感動の助詞最後に來る。

〔一四〇〕雪ぞ降り出でたれば、……

この心得こそ何人も守るべきに、……

右の如く、句の中にあらはれたるや、か、ぞ、こその類は最後の述語の上に、何等の影響をも及さざるものとす。

練習二六

係結の誤あらば正せ。

1. 山は高きが故に貴からず、木あるを以て貴しとする。
2. 跡白浪と逃失せたる。
3. この種の學者こそ眞に國家の寶なり。
4. 今更に何といふべしや。
5. 帆は風に取られ、楫は浪に碎かるる。
6. 花ぞむかしの香に匂ひたり。
7. かれこそ時鳥なりと敎へらるゝを聞きて。
8. 好きこそ物の上手なり。
9. これなん世に名高き不破の關なる。

10. 聲聞く時ぞ秋は悲しや。

第四篇 正誤篇

第二十八章 假名遣

〔四一〕

1. 書きて 咲きて ― 書いて 咲いて イの音になる。
2. 問ひて ― 問うて ウの音になる。
3. 死にて 飛びて 讀みて ― 死んで 飛んで 讀んで 撥ぬる音になる。
4. 勝ちて 取りて 食ひて ― 勝つて 取つて 食つて 促(ツマ)る音になる。

動詞の助詞てに連る時は、右の如く音の變化を來すことあり。之を動詞の音便といふ。下の段の音便の形は、主として口語に用ふれども、間、文語にも用ふ。

右の中誤り易きは、(1)(2)(3)なり。(1)と(2)とは母音に轉じたるものゆゑ、必ずい、うを用ひざるべからず。然るに往々ひ、ふを用ふるものあり。これ動詞の活用にひ、ふのもの多きを以て、之に紛れたる誤なり。

天を仰ひで歎す。

況や余におひてをや。

子を思ふて眠らず。

幾度訪ふても逢はず。

願ふてもなき仕合なり。

いづれもい又はうに改むべきなり。

(3)はに、び、みの音が撥ぬる音に轉じたるものなれば、んの假名を用ふべし。然るに近來はむを用ふる人あり。

舌を嚙むで死す。

飛むで火に入る夏の蟲。

死むで花身が咲くものか。

これ等は皆んに改めざるべからず。

〔四一〕悲しきかな。　悲しいかな。

之を久しくす。　之を久しうす。

形容詞の活用き、くも亦音便にてい、うの母音に轉ず。かゝる場合にひ、ふを用ふるは許し難き誤謬なり。

天勾踐を空しふする勿れ。

昨日は御見舞を辱ふし謝し奉り候。
歌は言を永ふす。
久しひかな余の君を見ざりしこと。
善ひかな言や。

皆い又はうに改むべきなり。

〔一四三〕つきたち　ついたち(朔)
あきひと　あきうど(商人)
てみづ　てうづ(手水)
かみかき　かうがい(笄)

名詞にもかくの如き音便あり。すべて音便の場合には母音の假名を用ふべし。左の如くひ、ゐ、ふ等を用ふるは皆誤なり。

きさゐの宮(后の宮)　キサキノミヤ。
やひば(刄)　ヤキバ。
おとふと(弟)　オトヒト。
かふべ(神戸)　カミベ。
こふぢ(小路)　コミチ。

〔一四四〕歎ずるに堪へたり。
能く教ふべし。
之を强ふべからず。
岡に生ひたるは松の木なり。

强ふ(上二)生ふ(上二)堪ふ(下二)教ふ(下二)はいづれもハ行に活用する語なり。然るを文法を學ばざる人は强ゆ、生ゆ、堪ゆ、教ゆの如く、ヤ行に活用せしむることあり。左の如

きは皆誤なり。

強いて詮義するに及ばず。

惜しむの情に堪えず。

教ゆるは習ふの半ばなり。

生いゆく先こそ樂しけれ。

〔一四五〕土地肥えたり。

病愈ゆ。

燈消えず。

國は富み榮ゆべし。

錢多く費えたり。

肥ゆ、愈ゆ、消ゆ、榮ゆ、費ゆ、等はいづれもヤ行下二段の動詞なり。然るをハ行又ワ行に書くは誤なり。

年を經て未だ愈へず。

家大に榮ふ。

秋高く馬肥ゑたり。

雪まだ消へず。

然して悔いず。

〔一四六〕老いぬれば同じことこそせられけれ。

恩を受けては必ず報いよ。

老ゆ、悔ゆ、報ゆ、はヤ行上二段の動詞なり。然るに之をもハ行ワ行に誤る人あり。

老ひては子に從ふ。

悔ふれども及ばず。

恩に報ふるに仇を以てす。

〔一四七〕山に木を植うべし。

年大に饑う。

花瓶を卓上に据ゑたり。

植う、饑う、据う(下二)は皆ワ行に活用する語なり。之をヤ行、ハ行に誤らざるやう注意すべし。

庭には池を穿ち、園には花を植ゆ。

饑へては食を擇ばず。

傍に三脚の椅子を据へたり。

〔一四八〕變ふ――變はる。

加ふ――加はる。

賜ふ――賜はる。

合ふ――合はず。

愈やす――愈ゆ。

肥やす――肥ゆ。

費やす――費ゆ。

右の如きは、上下いづれが一方の動詞の活用を知れば、他方の動詞の假名遣も自ら明瞭になるなり。

〔一四九〕山に攀づ。

衆に抽んづ。

ず、づの音も亦誤り易し。サ行變格動詞の外には、ザ行に活用する動詞はまず(交混)の一語あるのみ。故に其の他はすべてダ行と知るべし。

〔一五〇〕動詞の連用形は皆名詞となる形なり。例へばはさみ、はかり、ほり、かすみ、くもり、ねむりの如

し。故に左の如き名詞は動詞の活用を知れば、其の假名遣を誤ることなく、名詞の假名遣を知れば、動詞の活用も自ら知らるべし。

ねがひ。 うたひ。 うらなひ。 こひ。 たゝかひ。

きこえ。 みえ。 はぢ。 をしへ。

練習二十七

假名遣の誤あらば正せ。

1. 學業衆に秀ず。
2. 白ふ暮れ殘る櫻の今始めて目につきたり。
3. 唯幾千代もと祝い納め申候。
4. 瀧の音は絶へて久しくなりぬれど。
5. 引續き渡らせ給ふ様かふ〴〵しう貴し。
6. 取わけうれしふ存候。

7. 幾千本となく植へつらねたり。
8. 蠶室毎に三四人の人ありて之を養えり。
9. いつしか庭も美しふ小春めきたるうらゝかさ。
10. 大みけしきうるはし馬車に召させ給へば、親王大臣たちを始め宮内官數をつくして御供つかふまつれり。

第二十九章 用言活用の誤

〔五一〕 棄てる神あれば助ける神あり。

棄てる、助けるは口語の活用にして文語の活用にあらず。文語にては棄つる、助くると言はざるべからず。

〔五二〕 生る時より死ぬ時まで。

國家の繁榮を來する所以なり。

終止形と連體形とを誤れる例なり。（六八）（六九）練習十九參照）。

〔一五三〕人學はずは道を知らず。

塵も積らば山となる。

金剛石も磨かざれば玉の光は無からん。

未然形と已然形とを誤れるなり。（七〇）（七一）練習二十參照）

〔一五四〕舟沈む　　舟を沈む。

家燒く　　家を燒く。

家建つ　　家を建つ。

右の例を見よ同じ動詞のやうにみゆれども、實は全く別の動詞なり。口語にて言試みれば、沈ムと沈メルと、燒ケルと燒クと建ツと建テルと上下自ら異るを知らん。よく口語

に照し合せて考ふれば次の如き誤を生ずるとなかるべし。

大工の家を建つ技術は、

餅を燒くるは妹の役なり、

日頃憂に沈めたりし身は、

〔一五五〕河豚は食ひたし命は惜しゝ。

あな勇ましゝ、勇ましゝ。

形容詞の活用にしを重ぬるは古文になし。（附錄參照）

練習二八

活用の誤あらば正せ。

1. 第一の鈴にて身支度を整ひ第二の鈴にて食堂に入る。
2. 小供を育つは婦人の務なり。
3. 春風吹きて池の氷も解き初めたり。

4. 昨夜の火事にて、本町通三十軒ばかり燒きたり。
5. 燒き殘りたる藏は五戸前ありといふ。
6. 了解せずば幾度も聞く。
7. かゝる御歌を御詠ありたる其の世、いと恨めしく口惜しゝ。
8. 若き時に學ばざれば老いて後悔あるべし。
9. 松風濤聲相和すあたりに、夏の日は送りたきものなり。
10. 東京の近傍は、暑を避けるに適したる場所少からず。

第三十章　用言と助動詞との連結の誤

〔一五六〕書けり、取れり、感せり、信せり。

完了の時を示す助動詞り（ら、り、る、れ）は右の如く四段の動詞サ行變格の動詞に限りて、其のえ段の音より連るものなり。然るに下二段の動詞にも亦、え段の音あるを以て堪へり、受けりの如く誤り用ふることあり。故に左の如く書くは皆誤なり。

1. 終夜眠らずして考へり。
2. 一旦再興せしが遂にまた絶えり。
3. 數年間伊藤先生の薫陶を受けり。
4. 所定の學科を卒業し、正に其の業を卒へり。

〔一五七〕及第

せ　き
し
し　しか
す

する

すれ

右の如く、過去の時を示すき(し、しか)はサ行變格に限り其の未然形よりし、しかの兩形に連る。然るに及第しゝ人、及第しゝかどもなど書くは誤なり。

1. この寺を建立しゝは今より二千年以前なり。
2. 募集ししかども應募者なかりき。
3. 開會しゝは四日閉會しゝは十一日なりき。

〔一五八〕落つべし　　落つまじ。

聞ゆべし　　聞ゆまじ。

信ずべし　　信ずまじ。

推量の助動詞にはラ行變格及びラ行變格と同様に活用するものの外は、皆右のやうに終止形より連るものとす。然るに左の如く連體形よりするは誤なり。

塵芥を捨つるべからず。

決して許さるゝまじ。

〔一五九〕落つるなり。

聞ゆるなり。

感ずるなり。

なりは右の如く連體形に連るものなり。然るを前項と反對に「落つなり」「聞ゆなり」「感ずなり」など誤ることあり。左の例は皆誤なり。

1. 余は飽くまでかく信ずなり。
2. 恰も電光の如く忽ち現れ、忽ち消ゆなり。

3. 甚だ不思議に覺ゆなり。

（受身）　（使役）　（使役の受身）

〔一六〇〕

	（受身）	（使役）	（使役の受身）
（四）讀ま （ラ變）あら （ナ變）死な	る	す	せらる。
（上二）起き （下二）棄て （上一）見 （下一）蹴 （サ變）信ぜ	らる	さす	させらる
（カ變）來			

右の如く、受身及び使役には二通りあり。る。す。せらる。は四段、ラ行變格、ナ行變格卽ち未然形にアの音を有する動詞より連り、らる。さす。させらる。は他の六種に連る。サ行變格の受身、使役、使役の受身等を左の如くいふは古文になし。（附錄參照）

（許容）

（受身）　周旋サル

（使役）　周旋サス

（使役ノ受身）　周旋サセラル

周旋セ。 → ラル。　サス。　サセラル。

〔一六一〕

（四）讀ま （ラ變）有ら （ナ變）死な （上二）起き （下二）棄て	しむ

(上一)見
(下二)蹴
(サ變)信ぜ
(カ變)來

使役の助動詞しむは右に示すが如く、一様に各種の動詞の下に附く。故に得(下二)見る(上一)は「見しむ」「得しむ」となるを至當とす。然るに近年は「見せしむ」「得せしむ」の如くせを挿みて用ふる例多し。古文になき事なり。(附錄參照)

練習二九

右の文に連結の誤あらば正せ。

1. 常には數百名の生徒を置きて、學理を研究させ夏期には養蠶の術を學ばしむなり。
2. 此の處に車を乘入るゝべからず。
3. 左右各十人を選びて、弓を射せしむ。
4. 內地の需要少からざるのみならず、また多く外國にも輸出さる。
5. 楠正成正行正儀菊池武光兒島高德などの書像をも御覽じらる。
6. 武內の久しき齡に似させ給へと、武者人形取添ひ奉り候。
7. 勉强しゝかども落第したり。
8. 御克己の德に富まさせ給へる、いと〳〵忝し。
9. 先生の此の言は、あへて女子をそしり辱めたるにあらず。全く親切の心よりして、深く女子を敎誡されたるなり。
10. 識古今に通じ、學東西を兼ねり。
11. 余今君と、東西數千里を隔てり。

第三十一章　助詞の誤

〔二六〇〕一粒の收穫だに無し。

〔一六二〕烏すら恩を知る況や人をや。

風吹き雨さへ降る。

だに、すらは物を比較して其の輕きを擧ぐるとき用ひ、さへはあるが上に物の重る意の助詞なり。だに、すらは今は多くさへと混用せり。

烏さへ恩を知る況や人をや。

一粒の收穫さへ無し。

古文を讀む時、よく心せよ。

〔一六三〕前へ進め　右へ向け。

東京に着く　君に渡す。

には時間にも場處にもせよ、或定まりたる點を指すに用ひ、へは方向を示すに用ふ。此の區別口語にては混同せるを以て、文章を書く人も、往々左の如き誤謬を犯すことあり。

1. 一帆南に向ひ一帆北に向ふ。
2. 午後六時京城へ着す。
3. 牡丹餅を棚へ載す。

〔一六四〕春と秋といづれがよき。

國語と教育との關係。

右の如くとは必ず繰返すべきものなり。然るに近文には下のとを略すこと珍しからず。

五と三の和は八なり。

日本と西洋の富を比較すれば。

右の如き場合には、とを略すとも誤謬を生ぜざるべし。但し、

五と三の自乘の和は幾何。

日本人と西洋人の子供を比較すれは。

の如き場合には左の二様に解せらるべし。

1. 二十五と九との和は三十四。
2. 五と九との和は十四。

1. 日本人の小供及び西洋人の小供。
2. 日本人及び西洋人の小供。

故に誤謬を生じ易き場合には、とを繰返すことを忘るべからず。

〔一六六〕歸りたりといふ。

見たる人なしとぞ。

かくの如く言切る形即ち終止形より、とに連るを本體とす。

今は「歸りたるといふ」。「見たる人なきとぞ」と用ふ。(附錄參照)

〔一六七〕(1)、如何なる理由ありとも如何に美麗なりとも。

(2)、悔ゆれども及ばず。　花麗しけれども刺あり。

右の如くとも、どもは上下相反する時に用ふる助詞なり。(1)は未然の意を有し、(2)は已然の意に用ふ。之を混用すべからず。

よむとも盡きじ　よめども盡きず。

言ふとも聽かざるべし。　言へども聽かず。

〔一六八〕前項のとも、どもの代りは、今はもを用ふること多し。

何等の理由あるも(アリトモ)說明せず。

こは疑問を生ずること無かるべし。

客は多きも(クトモ / ケレドモ)買手は少かるべし。

こは二樣に解釋し得らるべし。

〔一六九〕我が思ふ人はありやなしやと。

汝は日本國民にあらずや。

これは疑問の助辭のやなり。右に示せる如く、終止形より續くを本體とす。然れども今は「あるや、なきや」の如く用ふる人多し。

あるか、なきか。

汝は日本國民に非るか。

かも同じく疑問の助辭にして、こは右の如く連體形より續くものとす。

〔一七〇〕疑問文に於ていつ、いくつ、誰、幾許、何處の如き

疑問をあらはす詞上に在るときは、下の疑問の助辭はやを用ひずして、かを用ふるを本體とす。

1. いつまでかくてあるべきか。
2. いつ出發し給ふか。
3. 年はいくつにかなり給へる。
4. 誰かある。

然るに今は、

其の答幾何なるや。

何時歸れるや。

など用ふること多し。

練習三〇

左の文に誤あらは正せ。

1. 讀本と文法の下卷を學ぶ。
2. まづ其の有益なるや、はた無益なるやを考ふべし。
3. 數日の旅行に過ぎざりしも、得る所は甚だ大なりき。
4. 吉野山の麓なる塔の尾の陵に葬り給ひしとぞ。
5. 學校より公園までは何町ばかりなるや。
6. 何人にてやおはすらん。
7. 天は耳なきも聽く。
8. 甲と乙といづれを選ぶや。
9. 多くの人に尋ねたれども、誰も知らざるべし。
10. 二人は免さるゝに、などや御身一人殘り留りたまふらん。
11. 夜深くなるまゝに雷すら鳴りはためきて。

第三十二章　係結の誤

〔一七〕ぞ、こその係に對しての誤は近世文に頗る多し。改めたきものにこそ。第二十七章を復習して、更に次の練習を試みよ。

練習三一

係結の誤あらば正せ。

1. 紅葉の錦きぬ人ぞなし。
2. 世の中は何か常なり、飛鳥川昨日の淵は今日は瀨になる。
3. 船の數幾千百艘、これぞ聲援隊なるべしとまづうなづかる。
4. せん方涙にくれてぞ別れけり。
5. 民をあはれませ給ふ御心の深さは此の一事にても知られたる。
6. 何とぞ根本の學問をさせたきものなる。

7. そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそ仇浪は立つ。

8. げに進みゆく御代のしるしにこそとおぼゆれ。

新定女子文典下卷 終

附錄　文法上許容ニ關スル事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」「異」ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル

許サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ヲ動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ
如何ニ批評セラルルトモ
强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ
嘲弄セラルルト思ヒテ
終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ
萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

十三、語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキ

ニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花
宗教ト道德ノ關係
京都ト神戸ト長崎ヘ行ク
最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例
史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ
史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン
幾何ナルヤ
如何ナル故ニヤ
如何ニスベキヤ

十五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ / スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ / ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルヽモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調查委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

大正元年九月廿三日印刷
大正元年九月廿六日發行
大正元年十一月四日訂正再版印刷
大正元年十一月七日訂正再版發行

新定女子文典奥附

定價　上巻金貳拾錢　下巻金貳拾錢

著作者　文學博士　芳賀矢一

發行者　東京市麹町區飯田町五丁目十二番地　直井潔

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市麹町區飯田町五丁目十二番地　文昌閣

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地　目黑書店　振替口座東京三五〇四番

著作權所有
文昌閣發行之證
HAGA 檢 芳賀